

児童劇団やまびこ座「ぞうのはなし 2015」

前情報で、暗い話かな？とと思っていましたが、そうではなく、子ども会のイベントという、日常生活の中から戦争について学んでいく形は、良かったと思います。

ただ台詞が聞き取りづらい人が何人かいました。クラスに一人はいるであろうテンションの高い女の子と、それをいさめる役の子、女の子の中に一人だけいる男の子、気弱そうな、戦争の話が怖がる女の子、対立する立場で出てくる子たち、などは、個性がしっかり見えるのですが、小さな子たちの役としての個性がなかったですね。テンションの高い子と他の子とのバランスが悪く、話をひっぱっていく役なのに、かえって彼女が浮いてしまったようで、もったいなかったです。芝居はアンサンブルですし、彼女のテンションを下げるのではなく、他の子達にもう少し頑張ってもらいたかったです。

対立するグループが出てきて、構成上よく出来ている話なのですが、自分たちに関係ないと言っていた彼らは結局変わってはいかないのですね。彼らの中のひとりだけが自分にも関係あるかもと言ってましたが、それだけで終わってしまい、他の子に影響も及ぼさず、尻切れトンボな感じでした。

場面転換の度に話が切れて、子どもたちが戦争中の動物たちについて調べて色んなことを知っていったり、子ども会の会合に加わってはいたけれど戦争の話が怖いと言っていた女の子が変化していく様子がわかりづらかったです。これは、構成上の問題かと思われます。象列車や、ちいちゃんのかげおくりや紙芝居など、エピソードが盛りだくさんすぎたせいかもしれません。

たとえば、象列車の話をするときなど、小さい子たちが前に出てくるのですが、観客に話しているのか、それとも、自分の知っている絵本のことを知らない先輩に話しているのかははっきりしません。劇中劇という形ならきっちりそうあるべきだし、そうでないなら、聞いている先輩への意識や、先輩の聞いている姿などに配慮が必要です。紙芝居の時のように、お話をしている人も聞いている人も、双方ともに関係しあって、ちゃんと存在させたほうが、ひとつの物語として繋げて行けたのではないのでしょうか。

今後の研鑽を期待します。

(講評)

児童劇団やまびこ座『ぞうのはなし2015』

忘らされてしまう「時代」を、次世代に伝えたいという思いが詰まった作品でした。「ことば」を大切に扱い、演劇の持つ豊かさ、表現の力を信じようとしている姿勢に共感を持ちました。昔の話しをおばあちゃんから聞くシーンや、「象列車」の話しや「動物と戦争」というモチーフを使ったこと、遠い世界のことでなく地元京都での「戦争」を話題したことは、戦争を知らない世代が、想像をふくらませる上で、「ひっかかり」を作りやすくしたと思います。昔の子どもたちを演じた役者が、戦争から目をそらす現代の若者を演じるなど「それぞれの時代を共有しよう」という配役は、芝居を重層的にしていたと感じました。それは、出演する子どもたちの教育的な意義からしても良かったのではないのでしょうか。聞き取りのため老人と子どもが交流するシーンも、同様に大変意義深く感じました。演じている子どもたちの多くは、しっかり発語できている上に、自然体で演じられていて、物語に入り込みやすかったです。

絵本の作者の思いがこもった、力強い絵を映像で使った点は動物を殺すということの悲惨さを強く印象づけましたし、最後の歌うシーンは観客が思わず手拍子をするほどはまっています、暗く陰鬱な戦争の空気から抜けて、希望に踏み出すような高揚感がありました。

芝居上の段取りが見えるところや、聞きづらいセリフがあるなど細かい所は、もちろん指導者の方はわかっておられるので割愛するとして、私がひとつ引っかかった点は、「戦争のことなど面倒くさい」という若者の扱いです。「戦争の悲惨さ」を知ろうとする動機を育むことや、「戦争の悲惨さ」の一面を知ることがこの芝居の目的だったように思います。むしろ「知るのは面倒くさい」と思うリアリティーに、寄り添った方が「今」の実情に合致したように思うのです。このお芝居が、一生懸命戦争のことを想像し、向き合わなければと考える、すなおで前向きな子ども達や、戦争の悲惨さについてリアリティーを持って想像できるおとなだけでなく、悲惨で暗いことを考えるのはそもそも面倒くさいと思う人をも、もう少し受け入れたほうが、むしろそうした若者のリアルな心を揺さぶったのではないかと感じました。

杉山準